

水城跡

[表のキャプション]

全長 1.2 キロメートルに及ぶこの厳重な警備の土塁は、この種の要塞としては最初で唯一のものである。博多湾から押し寄せる外国の軍隊から九州を守るため、7 世紀半ばに築かれた。半世紀が経つ頃には、アジア大陸から大宰府への玄関口となっていた。

[裏の解説]

664 年、日本の統治者達はアジア大陸からの侵略を危惧しており、博多湾は外国船が上陸する可能性が最も高い場所と考えられていた。博多湾のすぐ南には、山に囲まれた広大な平野が広がっていた。もしここを要塞化することができれば、この極めて防御力の高い拠点で侵略軍の進軍を食い止める、湾岸地域に釘付けにすることができる。

この目的のため、朝廷は湾の南側にある 2 つの山の間を塞ぎ平野部への進入を阻止するための防壁として、過去に当地で例のなかったような巨大な土塁の建設を命じた。朝鮮半島から渡来した技術を駆使して築かれた水城は高さ 10 メートルの城壁であった。水城の北側には、当時の弓の最大射程距離を超える幅 60 メートルの濠があった。門が 2 つ、東と西にあった。西側の門は石垣で補強されており、東側のものは発掘されていないが、同じものだったと推定される。土塁は、土、粘土、砂

を何層にも積み重ねて固め、耐久性のある。

当時、御笠川は新たに砦が築かれようとしていた場所の中央を通り、博多湾へと北上していた。ある調査によると、川の水は石を敷き詰めた通り道流れ、その上を流れた水が堤防の下を流れて濠を満たしていたという。また、周囲の谷川からも水を引いていた。この巧みに水を利用した防衛体制が、この砦の名前である「水城」の由来となった。

侵略の恐れが薄れた後、水城は太宰府の北側の壁となった。7 世紀後半から、外国の高官や商人達は、東の帝都に向かう前に太宰府で受付された。彼らは城の西門から入り、西門は文字どおり、象徴的な日本の玄関口であった。一方、奈良や京都から来た役人や国内の訪問者は、東門から太宰府に入った。防衛の役割を終えた後も、水城は 12 世紀頃まで、玄関口としての役割を果たした。

現在も太宰府市や大野城市では、水城の堤防の大部分を見ることができる。西門の跡は水城ゆめ広場から歩いて数分のところにある。